

人生の教室としての 美術館

大和文華館々長 矢代幸雄

私は大和文華館の館長になって以来、館長というものは、毎日入場者が幾人あったかという問題に、案外関心を持つものだということに気がついたのであります。つまり館で行われている展覧会に世間がどれだけ興味を持ってきているか、つまり展覧会が成功か否かは、ひとまず入場者の数に現われてくるからであります。そしてまた私は館長室からギャラリーを透し見ながら、今日は随分たくさん入場者が来ているように思っていて、その数を聞いてみると、案外多くないという返事を受けとることがあります。これは何故だろうか、とよく観察しますと、大和文華館の来訪者は、まず展覧会場を見て回りますが、そういう人々は飽きると、池に面したバルコニーに出てそこで外の新鮮な空気を吸って、外の広い景色を眺めたり、或は水面に寄せるさざ波を見たりして、そして眼を休めて、再び館内に帰って来て展示美術品を眺める。あるいは椅子に腰かけてお連れの人々と談笑したりしています。つまり入場者がゆっくりと館内に居て、楽しんでくれているようであります。つまり入場者が陳列品を一応見て回ったら、直ぐ館から出ていってしまうということではなく、館内にゆっくり居て、楽しんでいてくれるということであり、それは美術館経営者にとっては非常に嬉しいことで、かくして美術の美は、館を訪れる人達の心持のうちに浸透し、いわば美術館を美を楽しむ団樂の場にくれてくれているからであります。そして美に寄る人々の団樂の場になるという美術館は、自ら情操教育はもちろん、いろいろの心の教育や社会教育が無理なく出来ていく場であります。

大和文華館には子供連れの入場者もたくさんありますが、中には館内を駆け回る子供もあります。私は小さな子供達が、あまりお行儀の悪いことをしたり、他人の迷惑になることをやったりすると、ギャラリーの係の娘さんに、子供の頭を撫でたりして、「そんなことをしてはいけませんよ。」などと、やさしく言わせるようにしておりますが、そうすると、子供は実によく言うことを聞くものです。するとやがてお母さんが気がついてくれます。現代の日本では、学校の先生も、家庭の親も、お行儀とかしつけとかいうことを、殆んどしないようでありまして、それが民主主義かと勘ちがいしているようであります。ところが、私が世界各国を幾度も見て回ったところでは、民主主義の進んだ国ほど、家庭のしつけはきびしいようであります。そしてまた外国では大抵人々は熱心に教会に行きますが、教会がまた単にお説教を聴くばかりでなく、いわば神の家で



あり、お行儀をよくしなければならないところであります。かくして外国では家庭と教会とそして学校という三ヶ所に於て、よいしつけと教育とをして、子供たち、即ち次の時代を背負って立つ任務を持つ子供達を立派な人間に育てあげようと、一生懸命になっているのであります。そして、外国では博物館とか美術館とか多数の人々の集まる公共施設は、同じく他人の迷惑にならないような、礼儀ある人間を育て上げるためのやさしい意味の訓練の場ともなっている所以であります。私は戦後の日本がともすれば、子供によいしつけをするのを忘れて、「民主主義」なるものを取り違えているように心配されるので、私は、大和文華館が自然美及び文化美の感化の下に、そういうやさしい意味のしつけの場としても、世の中のために役立てほしいと願っている所以であります。

私は大和文華館の内外をよく見回っておりますが、文華館が自然美と芸術美との調和のとれたよい環境をもつ、ということを非常に感謝しております。館にはたびたび若い学生たちが団体でやってまいります、大体みなお行儀がよく、無論騒ぐことなどはなく、つまり館内外の静かな空気を乱すことはなく、ゆるゆると見学をしているのを見て、有難いことだと喜んでおります。つまり自然美と文化美のよい環境に取り囲まれて、青年達は自らそれらの感化を満身に受け、社会人として静かな思慮と規律ある行動を体得し、将来、社会に立つようになって実行してくれるようになるのではないかと楽しみにしているのであります。

勿論文華館にもまだ足りないところが沢山あり、それらも追々整備するように気をつけておりますが、ここを訪ねて下さる方々も、この大和文華館が美の教室であると同時に、人生の教室にもなるように、御協力を願いたいと思っている次第であります。

季刊 美のたより No.3

昭和42年10月1日

発行 大和文華館